

保育現場と協働した実践研究 － 令和4年度大分県保育事業研究大会分科会報告－

渡邊はるか，菅原 航平，伊藤 京子，大関 美鈴
齋藤 範子，助安 明美，田中 美貴，東保 美香

【要旨】

令和5年1月27日に開催された「第49回大分県保育事業研究大会」の助言者を別府大学短期大学部教員が務めた。分科会「新たな時代の保育実践」菅原，助安，分科会「配慮を必要とする子どもや家庭への支援に向けて」大関，齋藤，分科会「公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割」渡邊，田中，分科会「家庭や地域との連携による食育の推進」伊藤，東保がそれぞれ担当した。

今後も短期大学部として組織的に保育現場と協働しながら研究を行うことで，連携をより深め，学生教育・現職者研修の質向上や養成校教員の実践的な知識・技能の向上につなげていきたい。

1. はじめに

別府大学短期大学部初等教育科では，例年100名以上を大分県内の保育所等に輩出している。多くの人材を輩出する本学であるが，さらなる養成教育の質向上には保育現場との連携は欠かせない。現在は「実習」を受け入れていただくことが連携の中心になっているが，保育士養成協議会の研究報告¹⁾において「保育現場との協働は，実習を中心とした養成の終盤から新任時代をつなぐリリースゾーンだけでなく，生涯を通しての保育者の成長過程に伴走するものではないだろうか」との指摘もある。また，養成校としても，保育経験のない教員にとって現場と協働しての研究は保育実践について学びを深め，教育の質を向上させるために重要なものである。

食物栄養科での栄養士養成においても，これまで食育等に関連して保育現場との交流を行ってきた。さらに，校外実習はこれまで医療機関が中心であったが，卒業生の就職先や学生の就職希望先に合わせて保育所等で実習を受け入れていただくことも増加している。このように栄養士養成においても保育現場と養成校の協働が求められている。

このような現状から別府大学短期大学部では，大分県保育連合会からの依頼を受け，県内4か

所の保育所，認定こども園と令和5年1月27日にオンラインで開催された「第49回大分県保育事業研究大会」での実践発表に向けて約1年間にわたり協働して研究を行った。また，研究大会当日も別府大学短期大学部教員が分科会助言者を務めた。それぞれの分科会の研究テーマ，共同研究園，担当教員は次の通りであった。

第1分科会：新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～

共同研究園：大分市ももぞのこども園

担当教員：菅原航平，助安明美

第2分科会：配慮を必要とする子どもや家庭への支援に向けて

共同研究園：玖珠郡くるみ夢児園

担当教員：大関美鈴，齋藤範子

第3分科会：公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割

共同研究園：玖珠郡ここのえ飯田こども園

担当教員：渡邊はるか，田中美貴

第4分科会：家庭や地域との連携による食育の推進

共同研究園：国東市伊美保育園

担当教員：伊藤京子，東保美香

本稿では，各分科会の発表概要及び担当教員による所感と，取組の成果と課題を報告する。

2. 第1分科会（菅原，助安）

（1）研究概要

テーマに設定された「新たな時代」は、将来を予測することが更に困難な時代となる中で、子どもが自らの人生を自分の力で切り拓いていくようになることが求められると考えられる。そのような子どもの資質能力を育むためには、乳幼児期に子どもが主体的に行動する経験が不可欠だと考えた。本研究では、子ども主体という言葉の意味合いを園としてどのように捉えるか、日常の保育を振り返り考察した。

まず、発表園では自然物との関わりを大切にしている。既成のおもちゃは使用方法が決まっており、それに従って遊ぶ為に自分で考えることも少なく受け身の遊びになることが多い。それに比べ、自然環境との関わりによる遊びは、何もないところから作り上げる面白さや崩して新たなものも作れる楽しさがある。砂遊びでは、砂はケーキにもなるし、他の子どもにとっては他のメニューに見立てることもでき、オリジナルの遊びが無限に展開される。

毎日繰り返し遊べる園庭環境の確保が大切なように、子どもたちの自立心を支える援助、つまり人的環境も同様に重要である。子どもが遊びを選択して、夢中に遊び込む中で、たくさんの感情が生じるが、それに共感してくれる友達や大人の存在がとても重要であると考えられる。

子どもの挑戦の最中に保育者が「あと少し」「頑張れ」とつつい声をかけてしまいたくなる場面がある。しかし、この言葉かけは適切とはいえない場合も多い。例えば、クライミングで遊んでいる子どもがいたとする。保育者の視点としては子どもの「今日は昨日より少し上の石を掴むことが出来た。」「自分で今日は『やめる』と決めた。」等の気持ちの揺らぎも含め、過程をいかに丁寧に細かく捉えることができるかということが重要となる。その子ども自身が「ここまで出来た!」とその日の遊びに満足感と喜びを感じているなら「見ていたよ!よかったね!」と気持ちに共感する言葉を発表園では大切にしている。子どもが遊びを終わりにしようとしている保育者の言葉かけで「もう少ししてみようかな」と子どもが無理をすることは怪我を招く

ことも考えられる。また、保育者の主観で「こうした方がいいよ」「ここが良かった」などと伝えることは、子どもの可能性を狭めてしまうこともある。さらに、他者から褒めてもらうことに価値を感じると、教育心理学の動機付けに関する理論において減退効果といわれるように内発的動機付けが低下して自分自身を信じる心が育ちづらいと考える。

今回の研究で、子どもたち主体の遊びが子どもの育ちに繋がることが確認できた。くわえて、園内での話し合いでは「自己実現を楽しんでいる時間」が子どもが主体性を持って遊び込んでいる姿だという結論に至った。

（2）助言者所感

子どもの主体性は長年にわたり保育において重要なテーマとなっており、現行の保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領等においても、重視されている点である。

子どもが主体的な姿を発揮するためには、まず子どもが興味関心を持ち関わりたくなる魅力的な環境を構成することが重要である。そのために、発表園では特に園庭環境の充実に力を入れており、子どもたちの豊かな遊びがみられた。

また、発表園では、子どもの遊びを援助する際、保育者の主観を押し付けたり、過剰に褒めたりすることで子どもの主体性や達成感が失われないように意識して言葉かけが行われていた。このように、子どもの環境との関わりのプロセスを葛藤なども含めて丁寧に捉えて援助を行うことは、子ども主体の保育を展開するためには必須であると考えられる。

くわえて、最近是不適切な保育について報道されることが残念ながら多くなっているが、不適切な保育を防ぐためにも子どもの主体性について園や保育者が考え続けることが重要であると考えられる。

約10年に1度の保育所保育指針等の改定（改訂）では、現在の社会変化のスピードには対応できなくなっている。保育者は、予測困難な時代に生きる子どもたちの資質・能力を育むため、保育所保育指針等を踏まえつつ、それを超える保育を常に検討して、実践していくことが求められている。

3. 第2分科会（大関，齊藤）

（1）研究概要

配慮を必要とする子どもや家庭への支援については、2008年度に改訂された幼稚園教育要領や保育所指針でも特別支援教育・障害児保育の重要性が指摘されている。今回のテーマでは発達障害を含む配慮を必要とする子どもや保護者の対応などに困難を感じている保育者が、適切な支援を提供するための方法についての実践について考察する。

この研究は玖珠町内の園長を中心とする5園で構成された玖珠町子ども園協議会で方向性を協議し、中堅研修対象である保育者を中心とした実践である。4年間にわたり、発達障害にかかわる研修を積み重ね、発達障害の特性理解や支援の方法について研修を行ってきた。専門機関の視察や講話を受ける中で、子どもの見立てを十分にを行うことの重要性を感じ、そのための方法としてABC分析を用いて気になる行動を記録した。

実践については、5園でそれぞれに対象児を決めて記録考察を行い、園長、主任保育士等と情報交換を行い、共有した。また、中堅研修対象の保育士5名で意見交換を行った。

子どもの見立てを行うための、ABC分析シートをもとに、記録シートを作成し、毎日の子どもの記録を実施した。記録することで、子どもの行動に変容が見られてきたため、「なぜこうなったのか」の仮説を立てやすくするためにさらに様式を改善した。様式の改善については、子ども園協議会の中で検討し、示唆を行った。

発表園の事例では、自分の思い通りにならない時や否定的なことを言われたり、されたりした時などに「激しく泣く、部屋を飛び出す、気分の浮き沈みが激しい」などの行動の特徴があるAくんについて、ABC分析シートを用いて記録を行った。記録の中から「思い通りにならないと泣く」を標的行動として取り上げ、「きっかけや原因」「声かけや対応」「結果」「保育士の推測、実践」を回数とともに記録することにした。同時に「落ち着いて過ごす」の回数も記録した。

A君の行動変容から、進級や、担当保育者の変更、クラスの移行、生活リズムの変化など様々

な環境の変化があったことがわかった。そのため、本児に無理のない進級練習や担当保育者の友達とのかかわりへの仲立ちなどを行った。その結果、本児の言葉数が増え理解力が高まったことなどの成長も加わり、自分から友達を求めたり関わろうとしたりするなど子どもの行動に変容が見られるようになった。

ABC分析シートの記録をすることで、気になる行動の理由を探ろうと保育者が対象児と向き合った結果、子どもの思いに寄り添い、良い手立てを考える保育の振り返りにつながった。

また、家庭への支援として記録を継続し、子どもの思いや行動の要因を細かく伝えることで、家庭でも保護者が子どもに寄り添う場面が増えて、専門機関や療育につながった。

園全体、子ども園協議会という組織として取り組み、子ども理解につなげる方法を探ったことで子どもの変化と保護者の姿勢に変容がみられた。そして、保育者に自信が付き、保護者と信頼関係の構築にもつながった。

（2）助言者所感

特別支援教育のニーズが増し発達障害を含む配慮の必要な子どもが増え、多様化している。今回の分科会に84名の保育者が参加しており、現場での意識の高さを感じた。

今回の実践報告は、5園の園長を中心とする玖珠町子ども園協議会がリーダーシップを取り、中堅職員を中心に研究に取り組んだ。環境整備や保育者の働きかけなどに変化をもたらし、子どもの変容や家庭支援につながった。

コロナ禍による仕事量の多さなど保育現場の抱える課題は多い。しかし、個々の保育者で抱えるのではなく園という組織で取り組むことが重要である。そして、今回の実践報告にもあったように、子どもの特性を理解し一人一人に寄り添った指導支援を行うことで、これから多様化する子どもや家庭への支援につながるものと期待する。

4. 第3分科会（渡邊，田中）

（1）研究概要

阿蘇くじゅう国立公園を有する九重町にあるここのえ飯田こども園は、2015年に九重町立飯田幼稚園（1965年より）と九重町立木の花保育園（1979年より）が統合し、幼保連携型認定こども園としてスタートした。地域の中心的な場所に立地しており、園児が歩いて行ける範囲に交流できる場所が点在し、統合以前から様々な地域との交流が盛んであった。その実績を引き継ぎつつ、現在も地域の中で子育て支援の拠点としての一端を担っている。

地域に根ざしたこども園になるために、これまでに行ってきた地域の老人会との交流を中心に、その成果や課題を整理し、コロナ禍でもできる、よりよい活動の在り方を探ることを目的として研究を進めた。これまでの地域での交流行事の成果や課題、関係者への聞き取り、関係機関との連携や情報発信について振り返り、分析・考察した。主として白鳥老人会との七夕まつり、公民館とのクリスマス会、農協女性部とのバケツ苗づくりやおにぎりづくり、地域との豆まきや芋掘りの交流活動についてである。これまでの活動の成果や課題を踏まえて、コロナ禍でもより充実した活動になるための取り組みの工夫をし、今年度は2年ぶりの交流行事、老人会との「七夕・短冊のお願い」「焼き芋」の交流行事を実施した。

結果として、子どもたちは地域のお年寄りを身近に感じ、優しく見守られ関わってもらうことで思いやりやいたわりの気持ちが生まれている。また、丸ごと受け入れてくれる温かい存在により、満足感や自己肯定感を感じている様子がうかがえた。さらに園での交流活動が話題になり、地域の人と人をつなぐきっかけとなった。地域の方と互惠性のある交流を積み重ねることにより、園と地域とがつながり地域ぐるみの子育てが実現できるとともに、やがては保護者に対する子育て支援へとつながっていくと考えられる。園統合前から続くお年寄りと子どもたちの交流は、双方にとって様々なメリットがあり、これからも続けていくべきことである。

また、地域の小学校や保健センターなどとの

交流も子どもたちの発達への助言や情報交換ができるなど、地域の様々な人や施設と連携することによってより充実した子育て支援を行っていくことも期待できる。これは公立認定こども園のメリットであり、役割の一つであると考えられる。地域全体のネットワークを通して、子育て家庭を支えるためにも、公立認定こども園が地域に根差した存在になり、中心となって地域と家庭をつなげる役割を担うことが大切であると感じている。これからも地域に根差した公立認定こども園を目指し、引き続き地域の方との交流活動と情報発信の充実を図っていきたい。

（2）助言者所感

発表では、ここのえ飯田こども園より、老人会を中心とした心の通う温かい地域交流の実践事例が多数示され、地域交流による豊かな教育活動の実現や子どもの育ちへのつながりが実証されたと考える。また、互惠性のある活動の在り方や継続的な活動の効果が明らかになったことはこの研究の成果であった。

今後の取組としては、公立の幼児教育・保育施設として、これまでの取組にある身近な地域の方との連携を基盤としつつも、園内の教育活動の充実に終わることなく、園内外の保護者に向けた子育て支援につなげていくことも必要である。

少子化が進む中、これからの幼児教育・保育施設には、地域において子どもたちを中心としたコミュニティ形成の基盤を担う役割も期待される。各施設や専門機関と連携を図りながらの広範な取組を見通した上で、互惠性・継続性を意識した活動を積み重ね、つながりの輪を広げていくことが望ましいと考える。

5. 第4分科会（伊藤，東保）

（1）研究概要

①テーマについて

国東市私立保育園調理師研究会（市内6園の代表者で構成）として研究に取り組むこととした。研究の目的は、厚生労働省が提唱する保育所保育指針の食育の目標である「5つの子ども像」の姿を達成し、さらに国東市の施策である「国東市健康づくり計画（第2次）」の食育推進計画において特に力を入れている“正しい食生活を身に付けよう”と“選んで食べる力を身に付けよう”の2つの目標を達成するために、食育環境を改善していくための“きっかけ作り”となる活動事例を提案することである。そこで「伝えよう食育の力を身に付ける大切さ～地域・家庭・保育者と共に～」を研究テーマとした。

②取組内容

主に次の取組を実施した。

- ・食育アンケート：朝食，野菜，地場産物，おたよりの内容等について計2回実施。
- ・食育ビンゴカード：食育ピクトグラム及び食育マーク（農林水産省）を参考にした9マスのビンゴカードを作成。
- ・調理師研究会だより：アンケート結果等から保護者の読む意欲を高める内容に工夫。

③結果及び考察

第1回目のアンケート結果は概ねどの項目も良好であったが、野菜の摂取について課題があることが分かり指導に繋がった。食育ビンゴカードは園児の食への関心が高まるきっかけ作りに多いに役立った。また、調理師研究会だよりは、国東市の健康状態や子どもの園の様子に対して関心が高いことが分かった。第2回目のアンケート結果では、「家庭での食育の話題が増えた家庭」が63%、「食育への関心が深まった家庭」が71%という結果だった。

食育アンケートの結果から得られた保護者の反応や、各園が取り組んだ食育活動の中で見られた子どもたちの姿から少しずつではあるが変化を感じることができた。また全体研修会や意見交換会を機に、他園の取組を参考に活動に取り入れたこと等、食育の大切さの共通認識を持たせたこともこの研究に大きく影響した。更に国

東市の健康づくり計画を基に進め、市の管理栄養士の方から具体的な指導や指示を頂きながら進めたことで効果が上がり、保育・調理・家庭・地域の連携に繋がったと示唆された。

（2）助言者所感

①研究を進めるにあたって

新型コロナウイルス感染防止の観点から多くの制約がある中での取組であったが、研究の拠り所、目標決めが明確であったことが研究をスムーズに進められた要因であると考えられた。第1回目のアンケートの結果が良かったことについては、これまで各園で積み上げてきた食育実践が園児や保護者の行動変容に繋がっていると考えられた。各園で丁寧に積み上げて来たものを整理しながら、新しい取組にチャレンジしたことは、研究の効率化を図ることができたと推察する。食に対する行動や意識の変化はすぐには表れないことだが、園児自身が取り組む食育や、保護者が見たい、知りたい内容を取り入れたおたよりの作成等により、確実に効果が上がっているとアンケートの結果から見て取れた。

②全体を通して

研究協力を得るために国東市内の各園で構成された私立保育園調理師研究会を主体とし、国東市医療保健課、公立保育園調理師研究会や国東市保育園協議会等の様々な関係部局と連携したことにより、研究対象となる施設や園児数の拡大、また各園の食育活動の発展に繋がり、双方にとって課題解決となるメリットが大きい研究となった。

6. まとめ

今回の保育現場と協働しての研究によって、保育士・栄養士養成校教員として地域の保育所等との連携を深め、相互に実践的・学術的知見を高めることができた。また、研究大会当日も4つの分科会合計で約200名の参加があり、活発な討議が行われ、発表園だけでなく、参加者にとっても有意義な時間となったと考えられる。

今後も短期大学部として組織的に保育現場と協働しながら研究を行うことで、連携をより深め、学生教育・現職者研修の質向上や養成校教員の実践的な知識・技能の向上につなげていきたい。

7. 引用文献

- 1) 保育士養成協議会専門委員会 平成25年度課題研究報告(第2報) 2014 保育士養成協議会 p.126